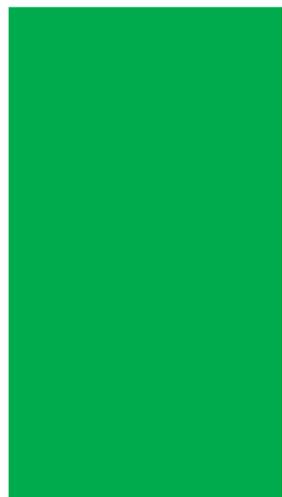


Creative Well-being Tokyo

だれもが文化で
つながる
サマーセッション
2023
報告書





Creative Well-being Tokyo

だれもが文化で
つながる
サマーセッション
2023
報告書

だれもが文化でつながる
サマーセッション2023

会期：2023年7月29日(土)～2023年8月6日(日)
会場：東京都美術館 講堂、ロビー階 第4公募展示室
主催：東京都、公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京

芸術文化による共生社会の実現に向けた

"新たなコミュニケーションのあり方"を創造する、9日間。

はじめに

東京都と公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京は、東京2020オリンピック・パラリンピックのレガシーとして、「だれもが文化でつながるサマーセッション2023」を2023年7月29日から8月6日まで東京都美術館（上野）で開催しました。

「アクセシビリティと共創」をテーマに、昨年度行われた国際カンファレンス「だれもが文化でつながる国際会議」で得た知見・ネットワークを国内文化施設や教育機関等へ広めるとともに、共生社会の実現に向けた取組を推進することを目的としました。

9日間に渡り実施した本セッションには、延べ約4,000名もの方々にご参加いただきました。国内外でアクセシビリティに携わる各分野のスペシャリストの知見や作品を通じた問いかけから、美術館、博物館、劇場やコンサートホールといった文化施設の担い手が抱える“情報保障”の課題、そして“だれもが楽しめる鑑賞体験”についてみなさまと共有し、対話し、新たな展望を求めて議論する場となりました。

2025年には、日本で初開催となる「デフリンピック」が東京都で行われます。本セッションでは、デフリンピックを視野に入れ、情報保障やろう者の表現の理解を深める“気づき”となるプログラムも多数実施しました。芸術文化が有する多様性や相互理解、社会包摂性を共に学び合ったことを起点に、“新たなコミュニケーションのあり方”を創造し、ここからさらに共生社会の実現に向けて活動を推進していきたいと考えています。

最後になりましたが、本セッションの実現にあたり、多大なるご協力をいただきました関係機関のみなさま、出展や出演、そして情報保障支援にご尽力いただきましたみなさま、何よりご参加いただきましたみなさまに、心より御礼申し上げます。

東京都、公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京

もくじ

2	はじめに
3	もくじ
4	だれもが文化でつながるサマーセッション 2023 開催概要
5	オープニング・主催者あいさつ
6	トークセッション 1 文化的「社会的処方」と共創の場
8	トークセッション 2 ろう者による表現
10	トークセッション 3 ふれることから出会う世界
12	トークセッション 4 来館しやすい美術館
14	トークセッション 5 劇場・ホールにおける共創的体験
16	トークセッション 6 デフリンピックに向けて
18	トークセッション 7 情報保障とテクノロジー
20	トークセッション 8 共創するとは何か～文化的実践を通して～
22	グラフィックレコーディング
24	レクチャー&ワークショップ 1 視覚身体言語とコミュニケーション
25	レクチャー&ワークショップ 2 やさしい日本語
26	レクチャー&ワークショップ 3 触察
27	レクチャー&ワークショップ 4 視覚障害と鑑賞プログラム
28	レクチャー&ワークショップ 5 車いすというメデイウム
29	レクチャー&ワークショップ 6 ろう文化
30	展示／パフォーマンス×ラボ
32	編集後記

だれもが文化でつながるサマーセッション2023 開催概要

【会 期】2023年7月29日(土)～2023年8月6日(日)

【会 場】東京都美術館 講堂、ロビー階 第4公募展示室

【開催プログラム】

トークセッション 1～8	アクセシビリティと共創をテーマに、さまざまな分野の専門家やアーティストを招き、文化施設での取組や最先端のテクノロジーの活用などについて対話を行う [会 期] 2023年7月29日(土)～7月31日(月) [会 場] 講堂
レクチャー & ワークショップ1～6	アクセシビリティの向上や共生社会の実現に向けて、社会に必要な情報保障や多様な他者とのコミュニケーションの形をともに考え体験する [会 期] 2023年8月1日(火)～8月6日(日) [会 場] ロビー階 第4公募展示室
パフォーマンス×ラボ	芸術作品を伝えるための情報保障について考える公開研究ラボ [会 期] 2023年8月1日(火)～8月6日(日) [会 場] ロビー階 第4公募展示室
展 示	現代美術家、ろう者等アーティストの作品展示や最先端のテクノロジーを用いた情報保障の取組を発表 [会 期] 2023年7月29日(土)～8月6日(日) [会 場] ロビー階 第4公募展示室

【企 画】公益社団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京

【運 営】株式会社ダブリューアール

【トークセッション総合司会】橋本 一郎

【アクセシビリティサポート】手話通訳、日本語字幕、触知図、サポートスタッフ

【参加費】無料

【来場者数】総数 3,823 名

講堂：計1,158名

内容：トークセッション(8セッション)

第4公募展示室：計2,665名

内容：レクチャー & ワークショップ(6プログラム)、
展示(9作家)、パフォーマンス×ラボ

WEB アーカイブのご案内

クリエイティブ・ウェルビーイング・トーキョー公式webサイトにて、「だれもが文化でつながるサマーセッション2023」の記録記事、グラフィックレコーディング等を掲載しております。

<https://creativewell.rekibun.or.jp/activity/detail/summersession2023/>



※本誌に記載されている登壇者、出演者の肩書は本イベント開催時(2023年8月時点)のものであります。

オープニング・主催者あいさつ

違いを超え多様性を認め合える社会の実現へ

東京都生活文化スポーツ局長 横山 英樹



今回の「サマーセッション2023」の目的は、昨年度に主催した、芸術文化の力で共生社会の実現を目指す総合的な国際カンファレンス「だれもが文化でつながる国際会議2022」で得た知見やネットワークを、国内の文化施設や教育機関へ広めるとともに、芸術文化による共生社会の実現に向けた取組をより一層推進するというものです。

アクセシビリティと共創をテーマに、様々な分野の専門家やアーティストをお招きしてトークセッションを行うほか、障害のあるアーティストの作品展示、新たなコミュニケーションのあり方を考える様々なワークショップを実施します。

2025年には、ここ東京でデフリンピックが開催されることも見据え、聴覚に障害のある方への情報保障や最先端のテクノロジーの紹介や、ろう者の表現理解を深める気づきとなるプログラムも多数実施します。このサマーセッションを契機に、世代や性別、障害の有無など、あらゆる違いを超えて、多様な価値と一人ひとりの個性を認め合える社会の実現に向けた取組を進めていきたいと考えています。

「宇宙船地球号」をリアリティに

アーツカウンシル東京機構長 青柳 正規

今、社会が持つ課題に対して、美術館や文化施設、アーツカウンシルのような中間支援団体がソリューションとしてどのように貢献できるかということが、重要な課題になってきています。芸術文化の充実と普及発展が、社会にとってどのような役割を果たすのかを自問し、時代の変化に合わせて進んでいかなければなりません。

昨年の国際会議でも取り上げられたのですが、1962年にバックミンスター・フラーが唱えた「宇宙船地球号」という言葉を、もう一度認識しなければいけないと思うのです。様々な方と共にこの地球号に乗っていること、インクルーシブをもっとリアリティのあるものにしていかなければと考えます。

今日から始まる「サマーセッション2023」で、議論と共に様々なアイデアをいただき、一人ひとりのウェルビーイングから文化活動や組織にとってのウェルビーイングまで、実り多い成果が出ることを期待しています。



01 TALK SESSION

「社会的処方」と 文化的 共創の場



社会とのつながりが、誰かの薬になる アートを介してウェルビーイングを育む 文化的「社会的処方」

健康の課題を抱える人に、薬と同じように地域とのつながりを処方して、問題を解決しようとする「社会的処方」が注目されています。「社会的処方」を軸に、大学における共創の場づくり、イギリスと日本における健康とウェルビーイングの取組、神奈川とロンドンの劇場の事例が紹介されました。

「社会的処方」を“文化的に”捉えるとは

「社会的処方」が注目を集める背景に、
孤立や孤独の社会問題がある

2030年の日本では、国民の3人に1人が65歳以上の高齢者になると予想されています。そのとき、公共保健上の最大の課題となるのが、超高齢社会における望まない孤立や孤独の問題です。未来を見据えて今、様々な機関が孤立や孤独への対策に取り組んでいます。その課題解決の手法として文化セクターが注目するのが「社会的処方」と言われています。これは、医療としての薬の処方ではなく、その人が心身ともに回復できるコミュニティへのつながりを処方するという新しいアプローチです。人の健康観について、身体的側面からだけでなく、その人を取り巻く社会的な状況が健康を決定づけるという社会認識の更新が、「社会的処方」を後押ししていると語られました。

アートがハピネス（幸福）に作用するとき、
それを「文化的処方」と捉えたい

「社会的処方」では、アートが大きな効力を発揮すると期待されています。なぜならアートが持つ重要な力は、様々な意味での「つな

がり」をつくるというものであり、つながりを処方しようとするときにアートを介すことで、他者と共通した感覚を持つことができたり、自分の内面との対話が促進されたりするためです。そしてそれは心のハピネスにも作用し、その人をより回復させることができるのだと語られました。健康やコミュニティ、人の尊厳を支える技術としてアートの力を借りることを、「社会的処方」を援用して「文化的処方」と日本で名付けられ、その価値観が広まってきています。

美術館・劇場は、
ウェルビーイングを高める共創の場

ウェルビーイングは「幸せ」と翻訳されることが多い言葉ですが、本質的には、「身体的、精神的、社会的に満たされている状態」のことを指すそうです。たとえばイギリスでは、ウェルビーイングは所属感やつながりを感じることで形成されると考えられ、美術館を拠点にした継続的な「社会的処方」のシステムが展開されています。今、世界的に美術館の役割は旧来の「芸術の殿堂」というイメージから、アクセスしやすい学びの場、楽しむ場として求められ、変化してきています。日本においても、美術館や劇場が多様な人たちと日常的に交わる場となっていくことが大切だという認識のもと、共創の場としての文化施設のあり方が模索されていると、事例を通じて共有されました。

MESSAGE

美術館や劇場側からも社会参加を

“溶け合わせたり混ぜ合わせたりすることが
得意なアートが異質なものをつなぐ
接着剤のような役割を果たそうとしています”

伊藤 達矢

伊藤さんは、東京藝術大学で「共生社会」をつくるアートコミュニケーション共創拠点を立ち上げ、孤独や孤立の問題に取り組んでいます。人々の幸福度を向上させ、生産的活動に関わる人口が増えていく未来社会を目指すためには、多様な機関や地域と従来とは異なる連携をしていくことが大切だと考え、アートの特性を活かした多層的なつながりを創出しています。



“私たち劇場は追い込まれています
生き残りをかけて、懸命に地域に売り込みを
かけているのが自分の実感です”

中野 敦之

「[文化的処方]と言うと、『社会課題を解決できますよ』という余裕を感じますが、そうではないはず」と話す中野さんは、これまで劇場を飛び出して神奈川県全域、そしてロンドンまで足を運び、そこに根ざす人々との対話と共創を繰り返してきました。現場での体験を通じて「美術館や劇場側の社会参加も考えなければいけない」という危機感を提示し、文化セクターが社会や生活の実態とダイレクトにつながり根を張ることの大切さを訴えました。



“人々が地球も含めてウェルビーイングになっていく
文化を扱うミュージアムも一体となり
取り組んでいくことが大切です”

稲庭 彩和子

稲庭さんは、伊藤さんと共に推進した「とびらプロジェクト」の10年間に軸に、美術館やアートを介して社会にどのようにコミュニケーションを広げていくかという研究を続けてきました。そして、アート振興の拠点である国立アトリサーチセンターから、健康とウェルビーイングをテーマに国内外の動向を調査し、アートを介したウェルビーイングと社会包摂の関係性を探究しています。

“アートや文化が、幸福と健康を生み出す
具体的な手法となり得る
文化的「社会的処方」の輪郭が見えてきました”

森 司

この時間を伴走した森は、最後に文化セクターが社会との接点を結んでいくやり方として、「社会的処方」を一つのひな型にして、そのあり方を検討しながら双方向性のある共創の場を作ること、そしてそれを大学や国や県の劇場・美術館が力強く推進していく重要性について触れました。

【日時】

2023年7月29日(土) 13:15～15:00

【場所】

東京都美術館 講堂

【登壇者】

- ・伊藤 達矢 (東京藝術大学社会連携センター特任教授)
- ・稲庭 彩和子 (国立アトリサーチセンター主任研究員)
- ・中野 敦之 (神奈川県民ホール 館長付、事業課員)

【モデレーター】

森 司 (アーツカウンシル東京 事業調整課長)

【情報保障支援】

- 手話通訳
・加藤 裕子 ・新田 彩子

日本語字幕
(UDトーク)



より詳しい
記事はWEBを
ご覧ください。

02 TALK SESSION

表現 ろう者による



集い、対話し、共有しながら ろう者の言語と身体性を考察する

ろう者の手話という言語、そして身体性は、どのように表現と結びついていくのでしょうか。自身もろう者であるデフアート研究者とアーティストが集い、ろう者の文化や表現について考察しました。同時に、ろう者と聴者など、異なる特性を持つ人が共に生きる社会を考える時間となりました。

ろう者の表現を捉え直し対話する

ろう者の表現とアイデンティティ、 そしてアートの力

登壇者からはそれぞれ、ろう者によって生み出される芸術である「Deaf Art (デフアート)」や、ろう者の経験を反映した作品「De'VIA (デビア)」、ろう者にとっての心地よい空間の「Deaf Space (デフスペース)」、ろう者の生活の中にあつた大切なものを残していく「archive (アーカイブ)」などについての取組事例が紹介されました。それぞれは独立しているようで、実は交わっている部分があり、根底にはろう者としてのアイデンティティが流れています。また、アートの力を介すことで、ろう者と聴者の文化的差異を知ることや、ろう者の経験や運動の歴史を共有すること、目に見えず分散されていたものごとを統合していくことなどが可能になると語られました。

ろう者にとっての自然とは、 手話で表現すること

ろう者の言語である手話には、日本語や英語などのその他の言語と比べて、ありのままに話すことが困難だった抑圧の時代があります。国内外で手話への偏見があり、日本でも音声優位の社会

への参加を促すために、ろう学校では手話が禁じられ、口話教育が行われてきました。教育の中で手話が認められるようになったのは、今からわずか15年ほど前のことです。手話を第一言語とするろう者にとって、「一歩外に出ると、文字や音声飛び交い、情報を無理やりリンクさせていく形で自然ではない」と感じる一方、「自分にとっての自然とは、頭の中に浮かんでくる映像、そのときに感じた目で見ていた現実が、手話となって自分の身体の中から出てきて、いろいろな意味を含めて表現できること」という視点が伝えられました。

対話し、共有する。 集うことの価値

ラウンドテーブルに移る際、登壇者と来場者、だれからも手話が見える位置関係になるよう、登壇者の座る位置が調整されました。「ろう者が集まると、このように自然と円座になる」と話されたように、これも1つの「デフスペース」です。ろう者の日常にあるこうした状況の共有は、集うことで育まれていくと考察されています。さらに、「言語も身体性も違う聴者にも、気づいていないだけで、目で捉えて、体の中に溜まっている共通する感覚があるのではないか」という観点のもと、ろう者だけでなく聴者も共に集い、これまで意識していなかったことを対話できる場を作っていくことが必要だと語られました。

MESSAGE

ろう者の表現を語り合うことから

“ろう者は目で生きる人々です
音声言語や文字の中にはない、目と手の中でこそ
生まれる何かがあります”

根本 和徳

手話が第一言語の環境で生まれ育ったネイティブサイナーである根本さんは、「ろう者が社会の中で様々な不安を抱えるときに、目と手から出る手話を安心して繰り出すことができる『HOME』のような公共の場所をつくりたい」と「めとてラボ」の取組を進めています。「目で捉えて体の中に溜まっているものは、ろう者だけではなく聴者の中にもあるはず」とし、異なる身体性や感覚、思考を持つ人たちが出会い、手話を自由に表現しながら交流を重ねることから文化を醸成していこうとしています。



“De'VIAを通じて、苦しみも抑圧も、
様々な経験を見ることができ
これはろう者自身の視野を広げ、
人生を生きる糧になります”

西 雄也

教育現場で美術教育に携わり、ろう者の経験を反映するDe'VIA (デビア) の研究者である西さんは、「ろう者としてのアイデンティティが曖昧な人が、De'VIAの表現を通じてろう者の文化や生き方、気持ちを知ることができる」と話します。ろう者の苦しみを吐露したい、言語化したいけれどもなかなか難しいときに、「ろう者の歴史や問題を学ぶことを可能にし、さらに経験の共有にとどまらず、こうしたつながりが社会に存在することで、ろう者だけではなく聴者の視野も広がる」と教えてくれました。

“アートを通してろう者と聴者の文化や
身体性の違い、記憶を話し合う場をつくる
その延長線で、ろう者の新たな表現の可能性が広がると思います”

管野 奈津美

当事者視点で言語や文化、身体性との関わりをテーマに作品制作に取り組むRe; Signing Project 代表の管野さんは、「ろう者による芸術表現の新たな可能性を模索し、社会への問いを発信する」ことを実践しています。同時に、「手話による記憶をろう者同士でもこれまで話し合う機会があまりなかった」と話し、「ろう者と聴者は言語や身体性が違うけれど、聞こえに関係なく共通する感覚があるのではないか」という視点から、聞こえる人も一緒に対話を通して手話、そしてろう者の表現を捉え直す場を作り、ろう者の表現をさらに広げていくことを考えています。



【日 時】
2023年7月29日(土) 15:30～17:00

【場 所】
東京都美術館 講堂

【登壇者】
・根本 和徳
(特別支援学校教員、めとてラボ全体統括)
・西 雄也(デフアート研究者)

【モデレーター】
管野 奈津美 (Re; Signing Project 代表)

【情報保障支援】
手話通訳
・小松 智美 ・戸井 有希
・山田 泰伸

日本語字幕
(UDトーク)



より詳しい
記事はWEBを
ご覧ください。

03 TALK SESSION

ふれることから 出会う世界



1. 日本におけるふれる鑑賞の展開

- 1960年代以前 ふれる鑑賞に関する記録はない
- 1960年代後半 ノースカロライナ美術館内に、メアリー・デューク・ビドル・ギャラリーが開設
- 1966年-1972年 視覚障害者向けのふれる展覧会を開催
- 1967年-1973年 日本では、彫刻界の作家たちがふれる鑑賞教室を開催
盲学校の生徒たちを招待し、鑑賞
- 1984年 「手でみるギャラリーTOM」が開設
- 1989年 名古屋市美術館「触れる喜び/手で見える彫刻展」
- 兵庫県立近代美術館「触覚による表現：フィラデルフィア美術館 Form in art展」を開催
- その後、「美術の中のかたち—手で見える造形」は現在も行われている

「触察」を通して作品に深くアクセスできる ふれる鑑賞の魅力

ふれる鑑賞が、視覚に障害のある方の芸術文化の楽しみ方の幅を広げると共に、鑑賞における新しい世界観やコミュニケーションを育んでいます。「触察」をテーマに、イタリアの手で見る美術館での実践や、映画*の誕生物語、日本におけるふれる鑑賞の歴史とインクルーシブ教育について語り合いました。

*本トークセッションは、登壇者の岡野晃子さんが制作したドキュメンタリー映画『手でふれてみる世界』の上映後に開催されました

日本の美術館に視覚障害のある方を！

「触察」～ 作品にふれる鑑賞から 起こること

視覚を前提に作られた社会や文化の中で、「視覚障害のある方にとって、手でふれることと見ることはイコールであるにもかかわらず、見えない人たちが置き去りにされている」という課題が提示されました。ふれる鑑賞の基礎となるのは、触覚を通して事物を認識することです。その体験の魅力は、ふれることで形の情報が得られるだけでなく、作品の素材や作家が過ごしてきた時間まで感じられたり、触覚から作品が語りかけてくる感覚がすることなど、「見る鑑賞とは異なる世界観で美にアクセスできる」点だと語られました。視覚と触覚は対比的・対立的に捉えられがち中、「そうではなく触覚は統合的に働く」「感覚を見直すことは本来人間の体にあったものを取り戻す学習にもなる」とふれる鑑賞が育む可能性が共有されました。

イタリアと日本のふれる鑑賞

インクルーシブ教育が1970年代から実践されているイタリアには、視覚障害のある当事者が自分たちのために作ったオメロ触覚美術館があります。希望を持ってアートに親しめる美術館とし

て、映画『手でふれてみる世界』も制作されました。日本において、ふれる鑑賞の特徴は、作家や視覚障害のある方の自発的な動きによって推進されてきた点です。海外では美術館が来館者サービスの一環として視覚障害のある方を迎える工夫をしてきた一方で、日本の国公立の美術館では、「自分たちのメインの活動とはどこか違うものとして捉えてきたのではないか」という見解も語られました。「日本の美術館にはなぜ視覚障害のある方が来館しにくいのか」という課題に、いま多くの美術館が向き合っています。

自分ごととして受け止め、 誰もが当事者になる

30周年を迎えたオメロ触覚美術館には、目の見える人も多数訪れ、視覚に障害のある人だけでなく、「晴眼者が視覚だけでなく触覚を通してより深い美術鑑賞ができるように」という観点からも「触察」の研究が行われています。視覚障害のある方の芸術文化の楽しみ方という点、「当事者が頑張る『触察』のスキルを高める」というニュアンスになりがち中、「社会モデル的な考え方で捉えること」や、「見える人は普段鑑賞において視覚しか使っていない」という見方の転換が提案されました。みんなで考え、そもそも当事者とは誰なのかという問いを繰り返し自分ごととして受け止め、誰もがその輪に参画することで、インクルーシブな社会になっていくと、今後の展望が語られました。

MESSAGE

アートが共生社会の基盤になっていく

“言葉では忘れてしまうことも
ふれるという感覚による経験は、記憶に深く残るそうです”

岡野 晃子

20年以上美術館で働いてきた岡野さんは、「自分の働く館でも彫刻にふれる取組を行えたら」とオメロ触覚美術館を訪ねました。けれど「何度か通っても彫刻に手でふれて鑑賞するとはどういうことなのかがよくわからなかった」のだそうです。そこで、映像を残そうとしたことが、映画『手でふれてみる世界』のはじまりです。岡野さんの「わからない」を起点に、人々の触覚による深い経験にふれ、それが映像として残されたことで、今では「美術作品にふれて鑑賞することを総合的に伝える作品」として各地で上映されています。

“美術の豊かさ、作品の持っている力は
見るだけでなくふれることでも
十分感じられると思っているのです”

半田 こづえ

新しい美術館の新定義や法改正を受けて、日本の多くの美術館が「自分たちの美術館をもっとオープンにしないといけない」と考え取組を進める中、半田さんは、「心からふれる鑑賞をおもしろがって発信して下さる方がひとりでも増えるほうがいい結果になるはず」と話します。ご自身も、初めて彫刻にふれて感動した体験を胸に、作品を鑑賞することを諦めず、美術館のアクセシビリティについて研究しながらふれる鑑賞の可能性を切り拓いています。



“アートが共生社会の基盤になっていくべき
美術館は、「何かをやってみよう」という夢や希望を
抱ける場所です”

茂木 一司

セッションの冒頭で「なぜ美術館に視覚障害のある方が来館しにくいのか」という問題を提起したモデレーターの茂木さんは、「日本人にはもっと多様性のレッスンが必要」だと話します。「アートのいいところは、感情によっていろいろなことをやろうとするところで、それは、相手を思いやることに直結している」と言い、「インクルーシブ・アート・エデュケーション」を自身の活動の理念に掲げ、多様な取組を推進しています。



【日 時】

2023年7月30日(日) 11:15～12:45

【場 所】

東京都美術館 講堂

【登壇者】

- ・岡野 晃子 (ヴァンジ彫刻庭園美術館副館長、映画『手でふれてみる世界』監督)
- ・半田 こづえ (明治学院大学 非常勤講師)

【モデレーター】

茂木 一司 (跡見学園女子大学 教授)

【情報保障支援】

- 手話通訳
・新田 彩子 ・山田 泰伸

- 日本語字幕
(UDトーク)



より詳しい
記事はWEBを
ご覧ください。

04 TALK SESSION

来館しやすい 美術館



みんな違う「誰にでも」ときどきでなく「いつでも」 美術館のアクセシビリティを広げるために

目の見えない人や耳の聞こえない人、小さな子どもがいる人や高齢者、車いすを使用する人や外国人にとって、必要な情報が得られ、居心地がよいと感じる美術館とはどのような場なのでしょうか。アクセシビリティやダイバーシティの分野で先駆的な取組を行ってきた美術館の事例を通して、美術館のありたい姿が語られました。

どうすれば、だれもが来館しやすい美術館にできるだろう

大切なのは、理解者や協力者を増やすこと

誰もが楽しめる美術館を目指し、サービスの改善や鑑賞プログラムの充実に取り組む中で、登壇者からは「理解者や協力者を増やすこと」、「展示室の当たり前を捉え直し、マナーを更新していくこと」、「自分たちのための企画なんだと思ってもらうこと」が重要であることが挙げられました。徳島県立近代美術館では、「無理だと感じることで、みんなで知恵を出し合えば実現できる」という考えのもと、アートイベントサポーターというボランティア組織が生まれています。水戸芸術館では、「日頃の展示会をいろいろな人たちに届ける」という考えから、目の前に協力者や提案者が現れたときに一緒に作る取組を重ねています。双方において共通するのは、世代や特性も多様な多くの人との連携や協働が大切だという視点でした。

ときどきインクルーシブではなく、 美術館全体をいつでも

「一過性のプログラムではなく、館全体をユニバーサルにしていきたい」と考える徳島県立近代美術館では、展示会を実験・実

証する場と捉えています。担当者はときに撃沈し、新しいことをやるほどに壁を感じるという中で、反省も踏まえて次の展示へとつなげ、よかったものは常設に活かすなど、館内での実践と恒常化を広げています。水戸芸術館では、「美術館は、作品を鑑賞するだけでなく、様々な機能を有している」という見方から、様々な年代やコミュニティを巻き込んだプログラムを行い、そのつながりから地域の大人と若い世代が共に運営の担い手になるような企画へと発展しているそうです。

ラベルを剥がし、ただの個人として

「手話通訳は耳の聞こえない人のためにあるのではなく、参加しているみんながコミュニケーションを取るために、手話のできない私たちにこそ必要だった」という気づきや、弱視の人への鑑賞サポートを提供した後に「その人の持てる今の見え方を、自分はどれだけ尊重できただろうか」と落ち込んだことなど、情報保障や支援のあり方を模索するみなさんの、現場から生まれた悩みや学びが共有されていきました。その時々自分の見え方で作品と向き合うために、みんな違う「誰にでも」美術館に愛着や親しみを持ってもらうため、障害や役割のラベルを剥がし、ただの個人として存在できる場に美術館がなっていけたらという、展望が語られました。

MESSAGE

美術館が持つ多彩な機能

“「わかりたい、伝えたい」という
想があれば、障害のあるなしや
年齢・立場は関係なく、
展示室という同じ空間にいる
喜びを感じられると
実感しています”

亀井 幸子



“美術館は、答えに追いつく
場所ではなく、
誰もが戸惑える場所
すべての人に戸惑う権利が
保障される場所であることが
大切です”

竹内 利夫

“「ここに集まると何かができる」
という期待感を丁寧に拾い
つなげていく美術館は、
作品鑑賞だけでなく、
様々な機能を有しています”

森山 純子



“美術から関心を抱いた職員が
どんどん違う分野を知って
人間的にも成長していくような
気づきが起こっています”

大内 郁

美術教員として特別支援学校やろう学校に勤務した後、徳島県立近代美術館で学校教育との連携事業やユニバーサルミュージアム事業を担当する亀井さんは、多様な企画を形にする中で、「いろいろな人がいて当たり前なんだ」という認識が、あるいは「みんな」というイメージが、どんどん具体的に広がっていったと話します。美術館は、だれもが同じ目線で同じ場を共有できる可能性がある場所だと感じています。



「期待してください、美術館に」と力強く発言した竹内さんは、徳島県立近代美術館開館時より勤務、ユニバーサルミュージアム事業に注力してきました。様々な形で情報の保障が行われた結果、展示や解説文を見て「わからない」と戸惑うことに対して、「そうですね、それが美術館というものです」と言うそうです。誰もが安心して戸惑える場所として、「良き保障が、良き学びにつながっていく」ことを追求しながら様々な展示プログラムを実践しています。

水戸芸術館開館時から教育普及事業に関わってきた森山さんは、「水戸芸術館では様々な年代、コミュニティに向けたプログラムを行っていますが、徹底する考えと方法は同じで、一人ひとりにとって、昨日よりよく生きる経験を提供すること」だと話します。その場所に関わる様々な人たちと形づくる実感を胸に、美術館が「多様な人が立場を超えフラットな関係性で交流することで、様々なことに気づいていくレッスンの場」になっていけばと考えています。



本セッションのモデレーターで、東京都渋谷公園通りギャラリー学芸員の大内さんは、多様な背景の人の創作活動やアクセシビリティを大切にすることを掲げてオープンしたギャラリーで働いています。「意欲はあるけれど当初は何をどうやっていいか塩梅が分からなかった。試行錯誤を重ねる中で、職員に人間的な成長や変化もあった」と教えてくれました。「多くの人が美術館を起点に関心をもち寄り一緒に考える」ことで、世界が良い形に変わっていくと考えています。

【日 時】

2023年7月30日(日) 13:30～15:00

【場 所】

東京都美術館 講堂

【登壇者】

- ・竹内 利夫 (徳島県立近代美術館上席学芸員)
- ・亀井 幸子 (徳島県立近代美術館主席)
- ・森山 純子 (水戸芸術館現代美術センター教育プログラムコーディネーター)

【モデレーター】

大内 郁
(東京都渋谷公園通りギャラリー文化共生課長・学芸員)

【情報保障支援】

- 手話通訳
・山崎 薫 ・山田 泰伸

- 日本語字幕
(UDトーク)



より詳しい
記事はWEBを
ご覧ください。

05 TALK SESSION

劇場・ホールにおける 共創的体験



芸術文化を体験し、関わる人が 多様性ある社会の担い手になっていく

作品が生まれるまでの間には、様々な出会いや心の動き、時間の経過があります。表面には表れることのないそうした部分こそ大切だという視点をもとに、障害のある方と一緒にいる表現活動や、人を軸にした様々なプログラムの取組事例から、芸術文化と多様性の間にあるアプローチが語られました。

芸術文化のアプローチの独自性

最も重要なのは、
“コトとしての芸術”ではないだろうか

冒頭に、「芸術活動では作品が全てのように感じるが、最も重要なのは、表現が生まれるまでの間に起こっている“コトとしての芸術”ではないか」という視点が共有されました。障害のある方によるダンスチーム「ハンドルズ」の取組からは、多様な特性のある人を全て受け入れる中で、本人も周りの人も面白くなって身軽になる状況が起こったといいます。あらゆる人が集い生きがいを感じる拠点になるために、人材育成を基盤とした多様なプログラムを展開する東京文化会館では、やってみようかなと思えるきっかけを作り、生き甲斐やコミュニケーションを育む機会づくりをしています。進める中で、多様な当事者を巻き込むプロセスに変化してきたことも語られました。共通するのは、やってみて経験を積み重ね、継続させることによって育まれる価値が大きかったという点です。

共に時間を過ごし、本番を体験することで
得られるもの

各地への遠征やコラボレーションなど、点から面への多様な広がりや形へとつながっていったハンドルズの活動から「どんな形でも本番があると、その後もずっとみんな生き生きできる、力になる」

ことが伝えられました。「ウェルビーイングを高めるときは、無理やりそれを高めようとしてもうまくいかないけれど、やりたいとか面白いという参加者の内的動機づけを触発する場をつくることが重要」と話は展開し、面白い場を作るコツは、「いい空気が作れそうな、出会いの場や何か発見できる場所」、「いろいろな人のニーズに応えられるようなものをたくさん作っていくこと」などのアイデアが、登壇者から挙げられました。

サステナブルな連携を
広げていくために

取組を継続する重要性が語られる中、育成プログラムを始めて今年で10年になる東京文化会館からは、ワークショップへの年間参加者数が1年目の10倍以上となり、子供たちの来館が増えたという嬉しい変化がある一方、「連携の継続のためには資金や継続的な資金調達の仕組みが必要」、「届けたい人にどう届けられるか」など、経験を通して得られた課題も共有されました。資金の面では、「それは費用対効果として悪いだろうか?」という問いも投げられます。「その1回で達成したことの数値を求められることが多い中、その人がなにか変わって、その変化が一生続いたり、生きがいを感じることにつながる、作品には見えてこない“コトとしての芸術”が充実しているかどうかで作品の良し悪しが決まってくるのではないか」という提言がありました。

MESSAGE

場を作り、体験し、伝え広める

“僕が与える一方ではなく、みんなが膨らませてくれるので
作品が勝手に膨らむことにもつながります
最初はこんな風になるとは考えていませんでした”

近藤 良平

振付家・ダンサーとして、主宰する「コンドルズ」や様々な構成・演出・振付を手がける近藤さんは、「ハンドルズ」に対し、「うまくまとめようなんて全然思いません。彼らは表現者としては間違いなく持っている気がします」と言います。「続けていく中で、表現が重層的になります。みなさん表現力がめちゃくちゃあります。そうした表現の中に、いろいろなものが豊かに転がっていると感じます」と話し、関わりの中での発見を共に楽しんでいるようです。



“経験を積み重ねることによって
見出されていくことや、成長していくことが
大きいと思います”

梶 奈生子



東京文化会館の主催事業を手がける梶さんは、貸館では実現しないような様々なプログラムを10年に渡って積み重ねてきました。「限られた観客が通う劇場から、あらゆる人が集い生きがいを感じる拠点にしていきたい」と、音楽ホールの場づくりを進めています。人材育成事業を通して発掘した人材を起用し、多様な教育普及・社会包摂、創造発信事業を生み出すなど、プログラム同士の循環も大切にしながら、「その先を取組が根付き、連携先まで波及していくように」長期的な視点で事業を実践しています。

“私たちは生き延びる術として表現活動をしてきたことに立ち返り
ウェルビーイング、そしてインクルーシブな活動への
参加を考えていきたいです”

中村 美亜

「歴史を振り返ると、困難にぶつかりながら生き延びてきた人間が、生活の中で育んできたものが芸術であり、それが文化になっていった」と話す中村さんは、芸術活動が人や社会に変化をもたらすプロセスや仕組みに関する研究を行っています。「芸術文化の予算が減らされていく今、自分が生き生きとしているのを身体で感じられる体験をすること、そしてその体験の価値をそれぞれが伝え広めていくことが、多様な社会を作っていくために大切ではないか」と、このセッションを締めくくりました。



【日 時】

2023年7月30日(日) 15:30～17:00

【場 所】

東京都美術館 講堂

【登壇者】

・近藤 良平 (振付家・ダンサー、コンドルズ 主宰、彩の国さいたま芸術劇場芸術監督)
・梶 奈生子 (東京文化会館事業企画課長)

【モデレーター】

中村 美亜 (九州大学大学院芸術工学研究院教授)

【情報保障支援】

手話通訳
・山崎 薫 ・山田 泰伸

日本語字幕
(UDトーク)



より詳しい
記事はWEBを
ご覧ください。

06 TALK SESSION

向けて デフリンピックに



伝統文化とスポーツ 表現の多様な選択肢に見るデフリンピックへの展望

2025年に、耳の聞こえないアスリートのための国際スポーツ大会「デフリンピック」が日本で初めて開催されます。世界のデフスポーツの現状の共有や、伝統文化と手話を掛け合わせた取組事例を交え、国内外のろう・難聴者と共に芸術文化を楽しむための文化施設の機能や、情報保障の選択肢について議論されました。

東京開催のデフリンピックを視野に

社会の理解不足がデフスポーツに与える影響

手話は言語であるという社会的な認識が少しずつ広まる中、セッションで提起されたのは「デフスポーツにおける課題」です。それは、耳が聞こえない人の社会参加を考えるときに、就労や医療の場面と同様に、スポーツ分野では今もなお高い壁が立ちはだかっているということです。大部分は、情報アクセシビリティやコミュニケーションの問題が占めており、聞こえない人への理解不足が起因して、大会運営費や派遣費用が足りないという問題も生じているそうです。ろう者が集いスポーツ大会を実施し、運営も担当する中で、「手話言語を通じて精神や身体技術が鍛えられていく」ことや「国際交流を深めて成長できる」ことの重要性に触れ、環境の確保や機会の創出への展望が共有されました。

手話能・デフリンピック後にも つながる多様な表現

喜多能楽堂は、通常の上演に手話の同時通訳を付ける「手話通訳付きの能」の取組を始め、間狂言の掛け合いを手話で行う

ステップを経て、手話通訳なしで演者である能楽師が手話演技を行う「手話能」という新たな表現を切り拓きました。結果としては「元々こういうものだったんじゃないか」と観客が手話も発見するきっかけになり、演者からは「手話と能がこんなに親和性が高い」という声が上がったそうです。ろう者の手話監修においては、「自分の手話表現が能にあった美を表現できているという新しい発見があった」と語られました。デフリンピックにおいても、こうした日本の伝統芸能や文化の発信を行うことで、育まれる相乗効果が期待されています。

芸術文化が培った伝え方の選択肢を スポーツにも

「手話能」の移り変わりと同様に、舞台演劇の手話通訳にも様々な更新がありました。手話通訳者を舞台袖に固定する形式のみでなく、役者の動きの中に入り込み、作品に関与した形で行うなど、多様な型が生み出されています。ろう者自身がろう者の役を手話で演じるあり方も広がってきています。演じる場所の条件や種類によって、通訳表現を選択できる演劇のあり方を参考に、スポーツに関しても場面によってふさわしい通訳を話し合い、選択肢の幅を広げ、デフリンピックに向けてできることを少しずつ進めて社会の変革につなげていくことが提案されました。

MESSAGE

デフリンピックへ、その先へ



“ろう者自身がどのように何を伝えたいのかということや
ろう者と聞こえる人の「ずれ」についての理解を広め
継続的に語り合っていきたいと思います”

大杉 豊

筑波技術大学で聞こえない学生のキャリア教育、手話言語の歴史的な変化や地域的な差異の研究を続ける大杉さんは、デフリンピック運動を統括する国際ろう者スポーツ委員会の副会長としても、デフスポーツの振興に取り組んでいます。「聞こえない人の求める生き方を社会に主張するための表現としての手話言語や、ろう者特有の文化について伝えること」を、2025年のデフリンピックを契機に推し進め、新たな共生社会の創造に向けて活動を進めています。

“初めて手話能の演技を見たときに、
背筋がぞわぞわした記憶があります
そういうものを味わえる空間の大事さを
我々は忘れちゃいけないと思います”

清水 言一

能のシテ方五流の1つ喜多流の本丸である喜多能楽堂館長の清水さんは、子供や外国の方、地域住民や障害のある方などに向けて、能楽の魅力伝える事業を推進しています。日本ろう者劇団の「手話狂言」の活動を知り、手話と出会ったことで、いくつかのプロセスを経て「手話能」を生み出しました。「スマホでドラマも映画も簡単に見られるようになり、コロナ禍で舞台を映像配信することも多い時代の中でこそ、演劇を生で体験できることの魅力や大切さがある」と教えてくれました。



“手話ブームは終わりません
ブームではなく、ろう者の文化、言語というものは
社会の中ではずっと消えることはありません”

江副 悟史

日本ろう者劇団の劇団代表を務め、俳優や手話表現者として幅広く活動する江副さんは、テレビドラマや映画、演劇を通じて「手話ブーム」という言葉をよく聞く中で、「手話という言葉は、ろう者の文化と共に社会から消えることがない」と強調します。IT技術の向上などで広がった観劇や鑑賞の選択肢を、デフリンピックやその後の展開で様々な国にアピールできればと考えています。



【日 時】

2023年7月31日(月) 10:00～11:30

【場 所】

東京都美術館 講堂

【登壇者】

・大杉 豊(筑波技術大学教授、
国際ろう者スポーツ委員会副会長)
・清水 言一(喜多能楽堂館長)

【モデレーター】

江副 悟史(日本ろう者劇団代表、俳優、手話表現者)

【情報保障支援】

手話通訳
・加藤 裕子 ・蓮池 通子
・長谷川 美紀 ・山田 泰伸



日本語字幕
(UDトーク)



より詳しい
記事はWEBを
ご覧ください。

07 TALK SESSION

情報保障と テクノロジー



テクノロジーと人の関係性が育む アクセシビリティ

国内において、最先端技術を用いたアクセシビリティの拡充などが推進され、取組が広がっています。文化施設での実践や研究事例を通して、多様な人や様々な領域をテクノロジーで接続させる、情報保障のあり方が語られました。

人と技術を掛け合わせて実装する

「あなたにも来てほしい」
メッセージをテクノロジーに乗せて

アクセシビリティ展示ツアーを行う日本科学未来館では、「新しいテクノロジーがあるからこそこの出会いがある」と言います。あるとき、聞こえない人への情報保障のため、当事者とその同行者が参加できる形で始めた「ろう・難聴者向けツアー」を、「文字と絵で伝えよう展示ツアー」に変え、聴者にも対象を拡大したところ、参加者同士がもっと仲良くなりたいたと、自然に手話で話そうとするコミュニケーションの機会が生まれたそうです。「出会いの場としてのミュージアムの価値を底上げする」事例です。多様な背景や事情をもつ人々に「あなたにも来てほしい」というメッセージを伝えるため、相手の姿を思い浮かべながらピンポイントにテクノロジーを開拓していくことが大切だと共有されました。

テクノロジーと人の関係性

感覚の反応時間とテクノロジーを掛け合わせ、空気の輪を人間の髪の毛に当てるなど、ろう・難聴者に音以外の方法で情報を伝えるアプローチの研究が進められています。そこには、身近な

不便を起点に生み出される当事者視点と、テクノロジーを掛け合わせた「コンピューターと人」という考え方があります。コンピューターと人をマッチングさせながら課題を解決することや、それを提供して終わりではなく、現場に赴いて修正を加え、課題を解決しつづける姿勢を持つことの重要性が語られました。日本科学未来館においても、テクノロジーの不具合があれば随時フィードバックし、開発チームがスピーディに改善していく仕組みができています。

文化の違いにも着目し、 相互に課題解決を

手話と声を文字にするテクノロジーの研究も進んでいます。一方で、「手話と日本語の文法の違いを取り入れるところまでは開発が進んでいない」、「テクノロジーがあるから情報保障は完成という対応は、相手への押し付けになりかねない」という警鐘も鳴らされます。AI で使用されるビッグデータを元にしており、少し前のデータを元に作られるため、過去の差別に対してもそのまま認識してしまうこともあるそうです。人を軸にテクノロジーを考えると、それぞれの文化の違いを知り、専門家と連携して共に開発するなど、異なる文化を踏まえうえて課題を解消する展開をしていくことが大切であると共有されました。

MESSAGE

ミュージアムの価値を底上げする テクノロジー

“これまで交わる機会の少なかった人同士の
コミュニケーションの機会は多様な人やモノの
出会いの場としてのミュージアムの価値を底上げします”

中野 夏海

中野さんは、日本科学未来館の科学コミュニケーターとして、未来館のアクセシビリティを推進しています。透明字幕パネルを使った展示ツアーや、視覚障害者向け展示ツアーを担当し、先進的なテクノロジーで喜ぶ人の笑顔と、テクノロジーだけでは解決できない課題の両方に向き合いながら、「ここに来ればリフレッシュできたり、新しいアイデアが得られると思ってもらえたら嬉しい」と、自分ならではの科学コミュニケーションを模索しています。



“バリアフリーやユニバーサルデザインなど
いろいろな言葉がありますが、
その言葉を使わなくてもいい未来になればと思います”

設楽 明寿



ろう・難聴者を対象としたアクセシビリティの研究を続けてきた設楽さんは、これまで透明ディスプレイに話した言葉を表示するシステムや、空気の輪を用いた呼びかけ支援システムを開発してきました。共に作る未来を目指し、研究チーム「xDiversity」にも参画し、様々な研究を進めています。「当事者という言葉も好きではないけれど、当事者であるろう・難聴者がもっと開発段階から入り、より一緒につくっていきける選択肢が増えていけばいい」と話します。

“多様性というのはアートの中では
オルタナティブな思考からスタートし
いかにそれをノーマルに変えていくかが重要です”

阿部 一直

山口情報芸術センター（YCAM）でメディアアートセンターの立ち上げに関わり、組織を縦割り化せずプロジェクトチーム全員で共有しながらクリエイションを生み出す取組を進めてきた阿部さんは、約10年前に、ALSに罹ったクリエイターにもう一度表現活動をしてもらうためのプロジェクトに関わりました。「課題をアイデアや技術と掛け合わせてどう実装していくか」という経験をもとに、多様なテクノロジーのキュレーションを行っています。



【日 時】

2023年7月31日(月) 12:30～14:00

【場 所】

東京都美術館 講堂

【登壇者】

・中野 夏海（日本科学未来館 科学コミュニケーター）
・設楽 明寿（筑波大学大学院 図書館情報メディア研究科 博士後期課程）

【モデレーター】

阿部 一直（キュレーター、プロデューサー、東京工芸大学芸術学部教授）

【情報保障支援】



手話通訳 ・小松 智美 ・蓮池 通子
・長谷川 美紀 ・山田 泰伸



日本語字幕
（UDトーク）



より詳しい
記事はWEBを
ご覧ください。

08 TALK SESSION

共創するとは何か 文化的実践を通して



共に自由になる 相互探索としての共創と共生社会のあり方

3日間に渡って開催されたトークセッションを締めくくるテーマは「共創」です。装いを軸にした地域の高齢者との協働の実践と、多様な身体や属性を持つ人と対話を重ねた研究事例を通して、「共に創る」ことの本質と可能性に迫り、共生社会への展望を次の国際会議へとつなぐキックオフとなりました。

共創するとは何か、新たなビジョンの方向性

「ずれ」が生み出す関係性

大阪西成区に暮らすお母さんたちと制作するファッションブランド「NISHINARI YOSHIO」の取組では、「最初の1年は文句ばかり。でも必ず拠点に来てくれて、皆さん時間をかけてとにかく作ってしまう。そのことに圧倒された」そうです。それは継続的に行うことで育まれる学び合いの価値と、協働におけるコミュニケーションの「ずれ」が生み出すものづくりの体験でした。身体の研究においても、ずれを意識的に作ることで、研究者と被験者という単純化された人間関係ではない新たな関係性になり、「何かが生まれる苗床になる」と語られました。

いろんな場所でいろんな人が出会って 学び合う場

「世界各地で見ず知らずの通行人とその場で服を交換する」実験からは、「パーソナルなものでありながら公共性もある」という両立につながり、両極端なものをつなげられる可能性が示唆されました。「視覚のない国をデザインしよう」という多様な身体から見える社会の姿を研究するワークショップ

ブからは、「視覚がないという条件が一つ加わっただけで、私たちが知っている所有の概念が根本からひっくり返される感覚がした」という驚きが共有されました。だれもがなるべく傷つかない線がひかれた領土内でやりとりをする社会の中で、その一線を踏み越えることにはリスクが生じることを認識しながらも、「いかに誘惑をして、その手前でちょっと外してみることができるか」、「あまりにも唐突なことを言うのではなく、その人の中に既にある要素をちょっとずらしたり、違うところに意識を向けたりする」など、つながりの中で実践的な探究をする極意が語られました。

共創とは、 わからなさを面白がる冒険

最後に「改めて、共創とは何か」の対話がありました。「共創というのが良いことのようにばかり語られるのも違和感がある」、「共創って、しなくちゃいけないものではない」と登壇者それぞれの共創に対する印象を共有した上で、次のように語られました。「自分ではよくわからない、いろんな発見があるかもしれない場所があるという態度で関わる。それは正解を知っていることより大事なこと」、「共創からこんなものができた、とわかりやすい図式で見せるのではなく、わからなさをわからないものとして面白がることを共創と呼んでいけるなら、可能性を感じる」という、共創のあり方への期待を共有して、セッションは終了しました。

MESSAGE

わからなさを理解しあえなさも面白がる



“人間というのはある種のわからなさや理解しあえなさの中で生きています
それってすごく豊かなことです”

西尾 美也

「学び合いとしてのアート」をテーマに、様々なアートプロジェクトやキュレトリアルワークを通して、アートが社会に果たす役割を実践的に探究する美術家の西尾さん。ふだん共創という言葉は使わず「ともに自由になる」と言うそうです。共創の手前にある共に学ぶプロセスを大切に、「人が出会い学び合う場ができるとおのずとその先には共創につながるのではないかと考えています。

“せっかく一緒にやるのであれば
その人がやったことや考えたことのないところに
飛び込みたい
お互いに発見があることが共創だと思います”

伊藤 亜紗

美学者の伊藤さんは、身体についての研究を推進しながら、さまざまな「ずれ」を生み出し、「いい無茶ぶり」ができる方法を模索しています。それは「自分の未知を相手に探ってもらい、踏み込んでもよい関係が、双方向的に起こっている」相互探索につながるものだと考え、「何かが生まれる苗床」と表現するように、活性化され続ける土壌がそこにあることこそ大事だと捉えています。



“芸術文化がもたらすものの可能性は大きい
わからなさも引き取りながら共に創ることを
怖がるよりも楽しみ共有することが世の中を面白くします”

森 司

クリエイティブ・ウェルビーイング・トーキョーの推進役を担う森は、「共創の場づくりのために文化施設にはどんな働きができるのか」というトークセッション1の問いに再び触れ、「アートや実験するとか、何か試すってすごくワクワクするんですね」という実感を言葉にしました。次の国際会議へ向けて「文化サイドからアクセシビリティや参画の形を考えていくときに、自由さや面白さをどこまで容認領域にしながら、だれもがという裾野を広げていくか、このバランスの取り方が重要」と3日間のトークセッションを締めくくりました。

【日 時】

2023年7月31日(月) 14:30～16:00

【場 所】

東京都美術館 講堂

【登壇者】

・西尾 美也 (美術家、東京藝術大学美術学部先端芸術表現科准教授)
・伊藤 亜紗 (美学者、東京工業大学科学技術創成研究院未来の人類研究センター長)

【モデレーター】

森 司 (アーツカウンシル東京 事業調整課長)

【情報保障支援】

手話通訳
・加藤 裕子 ・瀬戸口 裕子

日本語字幕
(UDトーク)



より詳しい
記事はWEBを
ご覧ください。

Graphic Recording

グラフィックレコーディング

講堂で行われたトークセッション開催時に、グラフィックレコーダーによってリアルタイムで描かれた文字とイラストの記録を展示しました。

WEBでPDF版を掲載しています。



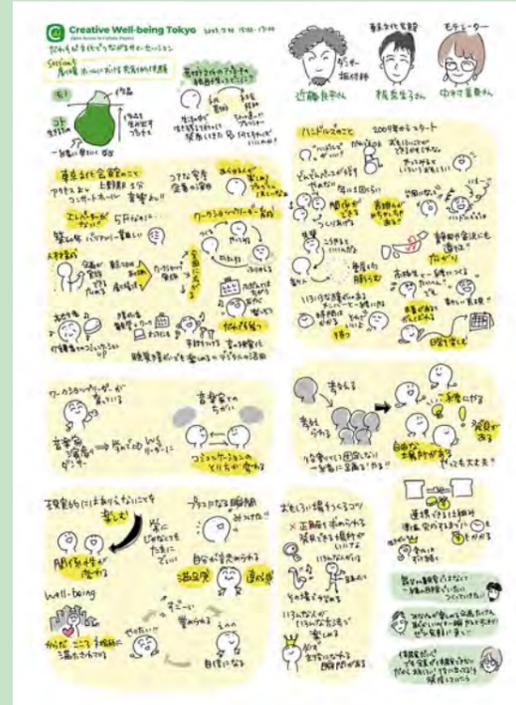
TALK SESSION 01
文化的「社会的処方」と共創の場



TALK SESSION 02
ろう者による表現



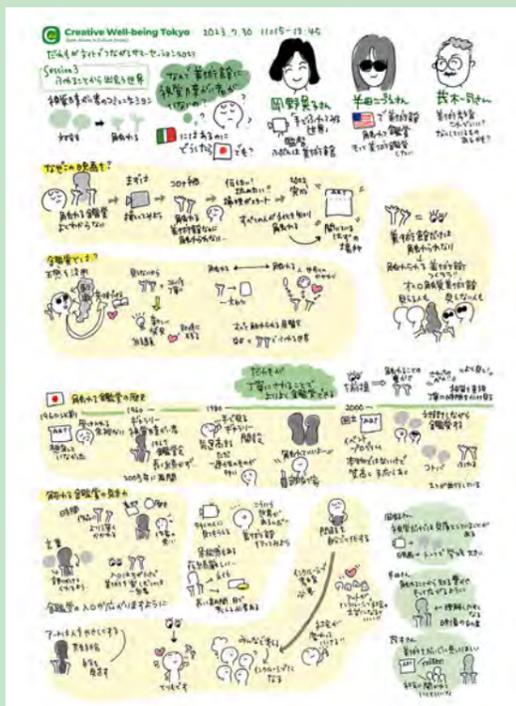
TALK SESSION 05
劇場・ホールにおける共創的体験



TALK SESSION 06
デフリンピックに向けて



TALK SESSION 03
ふれることから出会う世界



TALK SESSION 04
来館しやすい美術館



TALK SESSION 07
情報保障とテクノロジー



TALK SESSION 08
共創するとは何か、文化的実践を通して



グラフィックレコーダー | 01.02.07 岡本 茂彦 | 03.05 岸 智子 | 04.06.08 こでら みう

視覚身体言語と コミュニケーション

「つたえる・つたえあう」という冒険

「たとえば文字で『花がきれい』と書いたとき、それがどんな花なのかまではなかなかイメージできませんよね。でも手話だったら、表情や動きと一緒にそれが伝えられるんです」。人はそれぞれ頭の中のイメージをどのように伝えているのか？講師の和田さんの問いを軸に、「つたえる、うけとる、つたえあう」ことを模索して、人の内側にある言語の世界にアクセスし、コミュニケーションのあり方を見つけていくワークが行われました。



1. 手話で、つたえる

ろう者のご両親のもとに生まれ、手話言語と音声言語、2つの世界を行き来して育った講師の和田さん。レクチャーはすべて手話でお話しし、和田さんの手話を手話通訳者が読み取って音声言語に通訳する形で進められました。

2. あなたの世界の中に あるもの

40名ほどの参加者がグループに分かれて、頭の中に浮かぶ世界をシェアしていきます。会場には多様な聞こえの特性がある人がいたので、グループごとのコミュニケーション方法も手話や筆談、ジェスチャーなどさまざまでした。

3. つたえかたの デッサン

ペアになり、和田さんから手渡された物を「ことばで、からだで、描いて、うごいて、触って、見立てて」つたえていきます。ワークが進むにつれて参加者にも笑顔が増えていました。

レクチャー & ワークショップの内容

1. レクチャー／
「つたえる・つたえあう」方法を模索する
2. ワーク／
・あなたの世界の中にあるもの3つ
・意識がどんなことをしているか考えてみよう
・つたえかたのデッサン
・モデルのデッサン 世界にあるもの3つ
3. 振り返りとまとめ

感覚と想像、身体性の再構築を考えたこの時間の最後に、「ここから、つたえる・つたえあう新しい冒険に出発してほしい」と和田さん。ここでの体験と託された想いを胸に、参加者それぞれが日々のコミュニケーションの場へと帰って行きました。

【日 時】

2023年8月1日(火) 13:30～15:30

【場 所】

東京都美術館 ロビー階 第4公募展示室

【講 師】

和田 夏実 (めとてラボ)

【情報保障支援】



手話通訳
・小松 智美
・新田 彩子



日本語字幕
(UDトーク)

より詳しい記事は
WEBをご覧ください。



世界をひらく やさしい日本語

みんなが幸せになる、相手に合わせた日本語調整

私たちは普段から相手に合わせ、意識的に・あるいは無意識のうちに、自分の使う日本語の伝え方を調整しています。それは、自分が言いたいこと、相手が言いたいことをお互いに伝え合うため。では、「やさしい日本語」はそれとどう違うのでしょうか。やさしい日本語が生まれた経緯やその使われ方について、レクチャーとワークを交えながら理解を深め、学んでいきました。



1. 減災のために生まれた

金田先生は、「阪神淡路大震災をきっかけに、災害の二次被害・三次被害を防ぐため、日本語を十分に使いこなせない人にも情報をきちんとその場で届けるために『やさしい日本語』は誕生しました」と説明。その難しさや課題感も踏まえてルールが開発され普及していったとのこと。

2. 「やさしい日本語」の ルール

「伝えたいことを整理して情報を取捨選択する」「イラストや図や記号を使ってわかりやすくする」「一文は短く」「曖昧な表現は使わない」など、話し言葉と書き言葉をわかりやすくする方法を学び、実際に出された言葉を「やさしい日本語」に変換してみました。

3. 日本語学習者になりきって聞く

「日本語学習中の外国の方に、自転車のルールや干支などについてどう説明するかを考え、模造紙に言葉やイラストで表現する」というお題が提示され、グループごとに考え発表していきます。聞く人は「日本語学習中の外国の方になりきる」というのもこの場でのルール。双方向に想像力を膨らませていきました。

レクチャー & ワークショップの内容

1. レクチャー／
・「やさしい日本語」が生まれたきっかけとその使われ方
・やさしい日本語のルール
2. ワーク／
・文章を「やさしい日本語」に変換してみる
・日本語学習中の外国人に日本のことを紹介する
3. 日本語学習者になりきって聞く
4. 振り返りとまとめ

「『やさしい日本語』にはいろんな可能性があります。誰もがこれを身につけることで、みんなハッピーになります」と話す金田先生。日本語学習者が生活しやすくなるのはもちろん、多様な人の交流機会が増え、普段日本語を使う人にとっても自らのコミュニケーション能力の向上につながります。参加者それぞれが自分の言語コミュニケーションも振り返る時間となりました。

【日 時】

2023年8月2日(水) 13:30～15:30

【場 所】

東京都美術館 ロビー階 第4公募展示室

【講 師】

金田 智子 (学習院大学 教授)
稲葉 未希 (公益財団法人東京都つながり創生財団)

【情報保障支援】



手話通訳
・瀬戸口 裕子
・中川 真弓



日本語字幕
(UDトーク)

より詳しい記事は
WEBをご覧ください。



LECTURE & WORKSHOP 03

触察

文化的概念をも共有する触察

なぜ絵画を「手でみる」のか

イタリアの盲人施設内にあるアンテロス美術館では、絵画作品を半立体的に翻案し、触覚を活用して作品を鑑賞することができます。それを後押しするイタリアの文化的な土壌とともに、「手でみる絵」の制作方法や、その広がりと共に日本の美術館で起こった変化などについて学び、半立体のレリーフをさわって鑑賞する体験もとおして、「触察」とは何かを考えていきました。



1. アートを楽しむ機会をすべての人に

「日本では長い間、目の見えない人は絵画を楽しめないと思われてきました。イタリアではアートを楽しむ機会がすべての人に保障されていて、この状況を世界に広げるべきだと思いました。言語で情報を補足したり、ほかの人が感じていることを共有したり、その積み重ねによって、美的な鑑賞は可能になるのです」。冒頭で、講師の大内先生が絵画鑑賞への思いを共有します。

2. 手でみることの価値

手でみることは、思想の構造や空間と時間のカテゴリーの基礎となる文化的概念を共有するためにも不可欠であり、手を使ってものを知る力の向上にもつながるということ。手でみるのが育む価値を、教育の観点からも学びます。

3. 「さわって見る」を体感する

会場に展示された、アンテロス美術館東京分館「手と目でみる教材ライブラリー」の所蔵作品である『最後の晚餐』や『神奈川沖波裏』等の半立体レリーフにさわっていきます。目をつぶり、手で感触を確かめながらときに首を傾げ、思い思いに作品を鑑賞していきました。

レクチャー & ワークショップの内容

1. レクチャー／

- ・視覚に障害のある人にとって美術鑑賞とは
- ・イタリア・アンテロス美術館の取組
- ・絵画を半立体に翻案する理由
- ・「手でみる絵」の制作方法

2. レクチャー & ワーク／

- ・「手と目でみる教材ライブラリー」所蔵作品と補助教材にふれる
- ・イタリアにおける「手でみる絵」の広がり

3. 質疑応答

質疑応答の中で大内先生は、「視覚はすぐに全体を把握できるが、触覚は時間がかかります。見えない方が私のライブラリーに来ると、1つの作品をたっぷり1時間かけて鑑賞します。部分部分をさわって、それをつなげて全体の大きな像を頭の中に描く。その作業を丁寧に進めていくことで、まとまったイメージが出来上がるのです」と話し、視覚に障害のある方の「触察」における物事の理解の仕方を共有してくれました。

【日 時】

2023年8月3日(木) 13:30～15:30

【場 所】

東京都美術館 ロビー階 第4公募展示室

【講 師】

大内 進
(星美学園短期大学日伊総合研究所 客員研究員)

【情報保障支援】



手話通訳
・石川 ありす
・山田 泰伸



日本語字幕
(UDトーク)

より詳しい記事は
WEBをご覧ください。



LECTURE & WORKSHOP 04

視覚障害と鑑賞プログラム

アートの楽しみ方を広げる 会話型鑑賞プログラム

全盲の美術鑑賞者、白鳥さんと一緒に

目が見える人と一緒に美術館に行き、喋りながら鑑賞する活動をしている全盲の白鳥さん。「たぶん、視覚に障害のある人の中でも僕はちょっとひねくれているというか、頭の中で映像をつくることをゴールにしていないです」と話す白鳥さんと参加者のみなさんが、作品を説明する鑑賞会ではなく、自分が感じたことを声に出し、新しい楽しみ方を試す鑑賞に出発しました。



1. 何を話してもいいし、話さなくてもいい

白鳥さんから「作品に関することだったら何を話してもいい。でも、喋りたくなかったら喋らなくてもいい。見たものをそのまま言葉にするとやりやすいかもしれないし、間違いを怖がる必要もない」と伝えられ、参加者はほっとした様子でした。

2. 喋りながら見る

展示会場内の作品を喋りながら見ていくみなさん。さわっていい作品にはふれてみながら、それぞれ感じたことを言葉にしていきます。白鳥さんも質問を投げかけ、参加者がそれに応じていくうちに、作品から受ける印象や解釈も行き交うように。ときには沈黙も。

3. みんな混ざって振り返り

鑑賞から戻った後は、会場でたまたま居合わせた人も輪の中に招いて振り返りが行われました。「頭の中に浮かんだイメージが全部言語化されるのがおもしろかった」「作品を客観的に説明するのではないのがよかった」「みんな何かないかなと探しているから、沈黙が気まづくなかった」などたくさん感想が出ました。

レクチャー & ワークショップの内容

1. オープニング&自己紹介

- 2. 鑑賞会／
- ・「NISHINARI YOSHIO」の服を鑑賞
- ・檜皮 一彦のインスタレーション作品を鑑賞

3. 振り返り

振り返りの時間に「最近、沈黙がすごく好きになっちゃった。そうなったときに、みんなどうしてるんだろうと想像するのが楽しい。だから、沈黙の時間もみんなでも共有すればいい」と話した白鳥さんにみなさんも共感していました。短い鑑賞の時間から、なにか共通の感覚が生まれたようです。見えない人と一緒に作品を鑑賞するとき、正確に言葉にすることを重視しがちですが、それだけではないあり方を探究できた時間となりました。

【日 時】

2023年8月4日(金) 13:30～16:00

【場 所】

東京都美術館 ロビー階 第4公募展示室

【講 師】

白鳥 建二(全盲の美術鑑賞者)
岩中 可南子(アートマネージャー)

【情報保障支援】



手話通訳
・新田 彩子
・山田 泰伸



日本語字幕
(UDトーク)

より詳しい記事は
WEBをご覧ください。



LECTURE & WORKSHOP 05

車いすというメディアム

車いすというメディアム

身体性を軸にしたインタラクティブアートの実践

自身も使用する車いすをテーマとしたインスタレーションやパフォーマンス作品を手がけるアーティストの檜皮一彦による、車いすを使ったワークショップ。参加者は会場で車いすを担ぎ、回し、移動しながら身体と空間、社会との関係性を見直し、その行為について思考するアートの実践をしました。



1. 自己紹介は初デートの思い出

自己紹介のときに出されたお題は、「初デートの思い出」を紹介するというもの。遠い記憶を手繰り寄せたり恥ずかしがったりしながらエピソードを共有する参加者。プライベートな話題である分、参加者同士の距離がぐっと縮まっていく様子。

2. ワッショイのミッションを策定

みんなで車いすを担いで移動する行為を「ワッショイ」と呼ぶ檜皮さんから、「今回のワッショイは、車いすに乗ったマネキン2体の初デートをみんなで手伝うこと」だと伝えられます。参加者はグループに分かれ、初デートを盛り上げるために行うミッションを考えます。

3. ワッショイギャラリートour

いざ、マネキンたちの初デートとなるサマーセッションのギャラリートourへ。参加者たちはワッショイしながら、マネキンの視線を合わせたり、時に自分に気持ちを憑依させて嬉しさを表す一回転をしたりと大忙しで賑やかでした。

レクチャー & ワークショップの内容

1. オープニング&アイスブレイク／
・初デートの思い出を語る
・初デートを盛り上げるルール策定
2. 「ワッショイ」でギャラリートour
3. 振り返り

檜皮さんが「2人にとって一生忘れられない初デートになったと思います」と言うと、参加者からは「初デートに力添えできてよかった」「車いすを囲んでみんなでコミュニケーションするこんな方法があるんだと興味深く感じました」といった感想が共有されました。終了後もたくさんの人が会場に残り、なにか離れたがたいその場の空気感を楽しんでいました。

【日 時】

2023年8月5日(土) 13:00～16:00

【場 所】

東京都美術館 ロビー階 第4公募展示室

【講 師】

檜皮 一彦 (アーティスト)
アシスタント: 富塚 絵美 (アーティスト)

【情報保障支援】



手話通訳
・南里 清美
・長谷川 美紀



日本語字幕 (UDトーク)

より詳しい記事は WEBをご覧ください。



LECTURE & WORKSHOP 06

ろう文化

ろう文化とその考え方

ろう者の文化は、手話言語を通して共有する知識や経験の集合体

「ろう文化」をテーマに学ぶこのレクチャーは、大杉先生の筑波技術大学での「ろう者の文化」の授業を一般にひらくかたちで行われました。文化とは何かを確認するところから、ろう文化の考え方やコミュニティのモデル、その表現まで、大杉先生と学生の演習も交えながら、体系的にろう文化について学んでいきました。



1. ろう・難聴の学生と一緒に学ぶ

大杉先生の大学の授業を履修する、ろう・難聴の学生たちも会場まで足を運び、普段と同じように手話言語で講義が行われました。ワークショップ参加者には、会場のモニターを通して講義の内容が字幕で表示されました。

2. ろう文化の演習

大杉先生は学生を前に呼び、ろう者の中で自然とルール化している肩叩きやアイコンタクトを再現したり、それとは異なるやり方をしてみて、学生たちの反応を確認していきます。

3. ろう者あるあるを漫画で共有

会場に展示されているろう者の日常が描かれた4コマ漫画を読んで、共感した作品を選び、それについて話し合う学生たち。「聞こえる人に違いを理解してもらうことも含めて、この漫画の広がりにはろう文化の発信につながると思います」と大杉先生。

レクチャー & ワークショップの内容

1. オープニング／「ろう文化」について学ぶ
2. レクチャー／
・ろう者のコミュニティ
・ろう者の文化の考え方
・時代により変化するろう者の生活様式
・ろう者の表現
3. ワーク／De'VIA (デビア) を実体験も交えて読み解く
4. 振り返りとまとめ

最後に「ろう者の文化は、ろう者一人ひとりが社会に参加していく中で、精神的な拠り所となるものです」と講義をまとめた大杉先生。このレクチャーに参加した人は、字幕や手話を介して講義を「見る」普段とは異なる体験をしました。ろう文化を学び知る貴重な時間になりました。

【日 時】

2023年8月6日(日) 13:30～15:30

【場 所】

東京都美術館 ロビー階 第4公募展示室

【講 師】

大杉 豊 (筑波技術大学 教授)

【情報保障支援】



手話通訳
・新田 彩子
・長谷川 美紀



日本語字幕 (UDトーク)

より詳しい記事は WEBをご覧ください。



展示

多様な身体・知覚・ コミュニケーション・文化に出会う

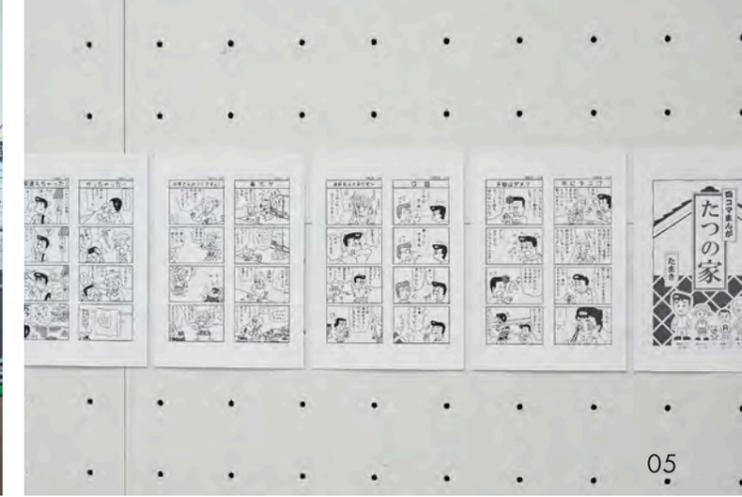
アーティストの作品を通して色とりどりの表現に出会い、鑑賞の楽しみや学ぶ機会を育むために、作品や取組の展示を行いました。



01



04



05



02



03



06



07

01 身体と多様性と表現 アーティスト：楢皮 一彦 協力：エプソン販売株式会社 | 02 情報保障とデバイス アーティスト：池田 晶紀 協力：株式会社 QDレーザ | 03 共創する活動 アーティスト：西尾 美也

04 TOUCH PARK アーティスト：magnet、たばたはやと | 05 ろう者と表現 企画協力（アドバイザー）：大杉 豊、管野 奈津美、西 雄也
アーティスト：坂口 環、齋藤 陽道、濱田 慎一郎 | 06 手でみる美術館「アンテロス」 | 07 デフリンピックに関する紹介パネル等の展示

パフォーマンス×ラボ

伝え方の探究

ジョイス・ラム作品『家族に関する考察のトリロジー』を題材に障害のある方々の当事者視点も交えながら芸術作品の伝え方を探究する公開研究ラボを行いました。

- Day0 ラボの見せ方や情報保障について検討。作品鑑賞
- Day1 作品の背景と言葉の意味をヒアリング・翻訳
- Day2 日本手話と日本語を軸に複数言語の表現方法を検討
- Day3 作品の文化的背景をどう伝えるか議論
- Day4 場の設計と表現の翻訳について検討
- Day5 身体性の再現、手話表現等の練習と調整
- Day6 パフォーマンス。振り返りのトークショー

アーティスト：ジョイス・ラム、めとてラボ
協力：エプソン販売株式会社



MAP



会場レイアウトも
確認できる触知図

ロビー階 第4公募展示室



芸術文化へのアクセシビリティ向上の取組に関する知見の交換の場として2022年に「だれもが文化でつながる国際会議」を開催しました。その成果を国内の事例とともに共有し、ネットワークする目的で本サマーセッションは国内会議として開催しました。東京都美術館講堂での8つのトークセッションと第4公募展示室での6つのレクチャー&ワークショップの討議・講義の全容はクリエイティブ・ウェルビーイング・トーキョーWEBサイトから閲覧いただけます。

クリエイティブ・ウェルビーイング・トーキョーとは「あらゆる人が芸術文化を楽しめる共生社会の実現」を目指す東京都の文化事業です。2025年に第25回夏季デフリンピック競技大会を開催する東京都は、文化施設や文化事業においてもアクセシビリティ向上に取り組んでいます。

そのような中開催された本サマーセッションでの学びは、「我々はまだ、知らないことを知らない」ということです。当たり前とする前提の相違の大きさの体感とも言えるものです。異文化間の交流では、違いを知り、違いを尊重し合うことが異文化理解とされています。例えば、ろう者と文化的に向き合うことは「ろう者の文化」を理解することを必要とします。

トークセッションやレクチャーは、課題に対する実践者としての経験を踏まえた質のある語りの数々でした。登壇前の打ち合わせでは、登壇者の方々は何をどこから話せばいいのか、多くの経験があるからこそ、思いを伝える言葉選びに困られていました。その内容が一朝一夕に形(思考や言葉)になったものでないことを物語っていました。

そもその前提を問い、再確認をするというアート・文化関係者が得意とするアプローチで各セッションが展開されたことで、芸術文化の力で共生社会を実現するための有意義な機会となりました。

今後も多くの方々と継続的に対話し、互いを知り、議論し、ともに理解し合うため、「クリエイティブ・ウェルビーイング・トーキョー」の取組を続けてまいります。

登壇者、参加者、関心を寄せてくださっている多くの方々への感謝を添えて、編集後記とさせていただきます。

アーツカウンシル東京 サマーセッションプログラムディレクター 森 司



だれもが文化でつながる サマーセッション 2023 報告書

2024年1月12日発行

編集：森 司 坂本 有理 竹丸 草子（アーツカウンシル東京） 平原 礼奈
デザイン：柿沼 智恵（ARCHIE）
執筆：平原 礼奈
制作協力：飛田 恵美子 福留 千晴
印刷：藤原印刷株式会社

発行：公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京
〒102-0073
東京都千代田区九段北4-1-28 九段ファーストプレイス5階
電話：03-6256-8435

本書の無断転写、複製、転載を禁じます。
©Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture

だれもが文化でつながる
サマーセッション2023
WEBアーカイブは
こちらから



